報告

保育者のまなざしの奥にあるもの フィンランド クーリッカ市の実践（2）

佐治由美子

二〇一一年三月、お茶の水女子大学ＥＣＣＥＬＬプロジェクト（「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業）メンバーである私は、フィンランドの保育現場を訪問する機会を得た。

本誌秋号ではデイケアセンター（保育所）の報告を行ったが、今号ではファミリーデイケア（家庭保育サービス）の実際と、それに触発された考察を展開したいと思う。

ファミリーデイケアとは、保育者が自宅を利用して子どもを預かり保育を行う形態であり、日本のいわゆる「保育ママ」の制度に近い。

フィンランドでは、第二次大戦後の女性の社会進出に伴う保育ニーズの増加に応える方法としてまずファミリーデイケアの拡充が進められ、次いでデイケアセンターが整備されていくという歴史があり、一九七三年の保育法において、ファミリーデイケアはその他のデイケアと同等の形態であるとすでに定められている。[注1]

一方、日本では、戦後制定された児童福祉法に保育所が位置付けられた結果、施設型の保育が主に普及することとなり、家庭的な規模の保育は保育所不足緩和策としての二次的な導入にとどまった。が、一九九〇年代以降の少子化対策、次いで待機児童対策の一環として、家庭的保育制度に対する国の見直しが進み、その裾野（すそ）は徐々に広まりつつある。[注2]

レーナさんのファミリーデイケア

クーリッカ市のデイケアセンター（保育所）とそれに隣接するプレスクール（就学前教育）の訪問を終えると、案内役のアンネ・ヴァルパスさん[注3]は、私たちを車に乗せ、10分足らずのドライブの後にレーナ・クーリッカさんの自宅へと誘ってくださった。

レーナさんは、三十二年間ファミリーデイケアの保育者を続けてきたベテランである。十か月後にはリタイアの予定だという。ご自身のお子さん方はすでに独立されていて、見せていただいた部屋は、幼い子どもたちが過ごすのにふさわしい雰囲気にデザインされていた。夕方に帰宅したご主人が、預かっている四人の子どもたちと遊んでくださるのだと、レーナさんはうれしそうに話された。

レーナさんのところでは、保護者の都合により早朝に預かるお子さんもあるが、だいたい子どもたちがそろう時間までに、部屋の掃除と昼食の準備をしておく毎日だという。この日の昼食のグラタンも、下ごしらえしてあったものをオーブンに入れてから子どもたちを庭の雪遊びに連れ出し、帰ってきたところで温かいグラタンをいただく段取りになっていた。子どもたちはレーナさんの用意する食事が大好きで、特に休日明けの月曜はたくさん食べるのだと、レーナさんは笑みを浮かべて話された。食卓についた子どもたちが満足そうな様子なので、「世界中の子どもたちの毎日が、こんなふうに幸せだといいと思います」と私が言うと、レーナさんは「小さい子どもたちにとって、家が暖かくて優しいということはとても大切です」と答えられた。そして、「今ここにいるA（二歳女児）のお母さんも、子どものころに、ここに来ていました。大人になって子どもを授かった時に、是非ともということで、私のところに預けに来てくれています」。レーナさんは慈しみに満ちたまなざしでそう語られた。

クーリッカ市には、しばらく前までは八十名ほどのファミリーデイケアの保育者がいたが、今は四十名前後に減り、若い人たちがやるようになったという。レーナさんが始めたころは、子ども好きの人たちがわが子と一緒に保育する場を家庭に開いて収入を得ていたが、ある時期から資格[注4]が必要となった。レーナさんは夜間に専門のコースを受けることで資格を取得されたが、そこで保育者を続けることを断念した人もいたということだった。資格取得を節目に、クーリッカでは保育者の世代交代が起こったということかもしれない。

周辺の保育者たちは、月に一回のペースで保育後に集まり、必要な情報を共有したり、新しい歌やゲームを伝え合ったりしているという。レーナさんは、近所に住む六人の保育者とチームを組んでいて、そのグループ全員の子どもたちが一緒になって公園で遊んだり、バスを借りてお出かけをしたりと、楽しんでいることを話してくださった。子どもたちも楽しいし、大人たちも他の大人に会うことができると話され、孤立しがちな環境にある保育者たちがつながることで保育をより豊かにしていくというシステムが、さりげなく構築されていることを感じた。

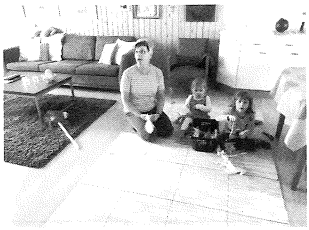
シティホールでのディスカッション

レーナさんのお宅を後にして、午後私たちが向かったのは、アンネさんの職場である市役所だった。市の職員の方々がお茶を飲みながら打ち合わせをしているラウンジに案内された。丸テーブルの席につくと、そこに市の職員が次々に集まり、アンネさんを含めて三人の方とのディスカッションが始まった。

この日見学したデイケアセンター、プレスクール、ファミリーデイケア、そして市立図書館についての感想をお話しした後、話は保育者養成に及んだ。大学の専門課程で保育の哲学はどのように学ぶかという私の質問に対するアンネさんの答えは実に印象深いものだった。

「ルソーやペスタロッチ、フレーベルなどの思想の概要をつかむ学びを一年次から始めていく。（アンネさんが通った）タンペレ大学は、子どもについて学生が哲学することに重点を置く教育をしていて、特に一年生の時は『なぜそう考えるのか？』『なぜ？』と考える時間がたくさん与えられた……」。日本の大学の保育者養成はどうだろうか？　学生が深く考える時間を、いま私たちはどのように保障しているだろうか？　私はわが身を省みる思いに迫られた。

また、アンネさんは、この日出会ったレーナさんのことを「子どもの目の高さで保育をすることのできる方」と評価された。確かに訪問した私たちと話す時にも、レーナさんは子どもと並んで座り、私たちを見上げるようにして話されていた。しかしこの時、私は、アンネさんの「子どもの目の高さ」という言葉を耳にしてはっとするものを感じた。それは、レーナさんの姿を語られた言葉であるし、私自身もこの言葉を学生への授業で用いたことがある。しかし、待てよ、と思い、私の心にかかっている印象をたどっていくと、レーナさんのお宅で私が二歳の女児Aとかかわった場面が浮かんできた。



レーナさんのお宅の居間に通された時に、私たちの視線が一斉に子どもたちに集まるのを避けたい思いもあり、私は子どもが遊んでいるスペースの一角に身を置き、レーナさんの方を向いて話を聞いていた。すると、Aが私の視野の中におもちゃの車を走らせた。私はすっと受け取って車の向きを変え、Aの方へ走らせた。遊びはその後子どもたちの間で続いていったので、私はまたレーナさんの話に集中した。すると間もなく、私は腕を引っ張られる力を感じた。見ると、それはAであった。幼い子どもとはフィンランド語で話す必要があるため私は語りかけることもできず、ただひたすらその車を受け取っては返すという遊びに付き合ったのだった。

この場面はもちろん、レーナさん、アンネさんの

目前で起こったことだった。私がシティホールでのやりとりの中で確認すると、アンネさんは「そうでした。子どもが大人を信頼したのですね」と語られた。子どもが大人を信頼する気持ちは、大人が子どもの方を向いて目を合わせようとしていない時にも起こるようである。

レーナさんの保育を見ていて、その全身からあふれるような温かな雰囲気は、子どもの助け手であろうとする熱意を感じさせた。徹底して子どもの側にいようとする慈愛に満ちたまなざし。それは、「子どもの目の高さ」に合わせることを越えて、まなざしの奥から発せられる慈しみ深さが、子どもたちを包み込んでいるようでもあった。

保育研究において保育者像を細分化して語る時に、日本でも「目の高さ」という表現を用いることがよくある。これは、分析的なアプローチによって保育の事象を外側からわかりやすいものにしようとする手法に基づく表現であるが、保育者の全身全霊から醸し出されてくる雰囲気というものは、その視界からは抜け落ちていくような気がしてならない。子どもの傍らにある保育者の丸ごとの豊かさは、保育においてそぎ落とすことのできないエッセンスであると思う。

保育者の存在そのものが語るものを保育の内側から言語化していく歩みを丁寧に重ねていきたいと、思いを新たにする訪問であった。

（お茶の水女子大学）

注

1 フィンランドのファミリーデイケアの歴史については、OECD Background Report.2000:"Early Childhood Education and Care Policy in Finland"に詳しい。

2 日本の家庭的保育の今後については、「平成二十三年度版 厚生労働白書」を参照されたい。

3 この方は、クーリッカ市役所の保育サービス課の責任者であり、この町の多様な保育の場と市役所との間をつなぐコーディネーターの役割を果たしていらした。

4 家庭的保育の保育者（child minder）の資格については、国家教育委員会が二〇〇〇年に新しい能力の必要条件を発表している。クーリッカでも、養成は国の教育システムに従っている、とアンネさんから伺った。